

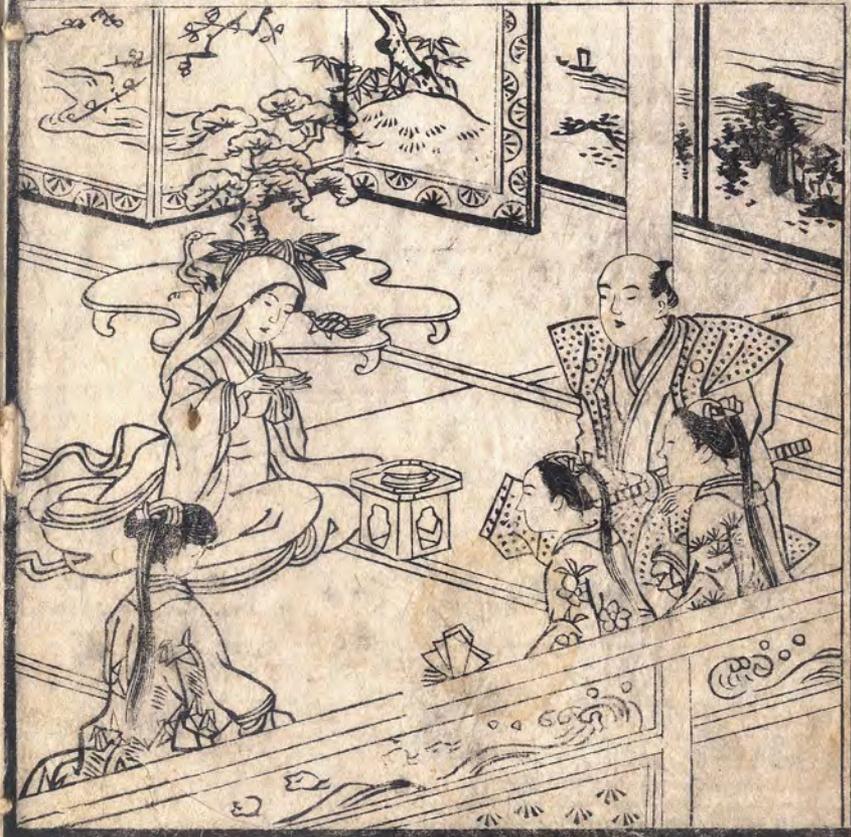
6863

萬
歲
婚
禮
往
來



禮往來

萬歲賀



從玄麻勝之の
 おんくの格さなりて
 一色さむむとの大
 畧ハと云ふ事あり
 勢礼の亦日おられる
 女中まうかきう
 少の春さうとの格
 別りし子相上座
 小祝の亦事甚重
 ハ相命右より祝は
 左より祝儀ハ水入
 さはまあさ年
 祝屏の亦の亦小並
 登一中下ノ香盤
 相なるえりし



角さうのさうさ
 うつ天目さうさ
 中下ノ香盤
 中下ノ香盤
 中下ノ香盤

高破

鳴臺之

皆禮往來

それ
 式禮往來之式法有増
 中入世社折男女新嫁
 事名一代一度と大禮法
 り敷可祝事あり
 式左殿と禮先角分限

可禮其肝要先結納

下俗名類と云唐土名納

兼又納儀事と云華表練福

縁酒唐織一板物惣着

一重表白後二以上三重表持

者名七荷七種なり中

湯つぎを小眉をい
 のみはたあへて相の
 かたへうへへてはまへて
 中かたはたはまへては
 文をたかたかたかた
 辰火はたかたかたかた
 わかたかたかたかた
 せかたかたかたかた
 角かたかたかたかた
 中かたかたかたかた
 入のかたかたかたかた
 ざりかたかたかたかた
 奥の化粧のたかたかた
 十二のたかたかたかた
 一のかたかたかたかた



水仙
 水
 花
 葉
 根
 茎
 花
 葉
 根
 茎
 花
 葉
 根
 茎

練板は物縫着
 二重のたかたかた
 白中袖一色
 荷二種
 中かたかたかた
 代金を取針
 一のかたかたかた

聳る方
 可なり
 重なる
 限る
 特
 積
 入

仍て女化は嫁して妻
 とらんころハまぐそめ
 ころをのちこの外の及ふ
 漆入うらたうやく再ハ
 異人ハすかんすかきと
 のきさるう又堂上ハハ
 女中ハ限らざるか大
 匠も齒と漆あつてハ
 是其の所代ナリ初と
 りつは其の殿あゆ
 ぬやまうど漆くあり
 いづれも髪ハ
 文字子の盤端の
 唐土黄帝の辰小葉
 顔つて人もの足沙と

何をあて写しと文字
 と制ゆる四般よかん
 と其の端と云ふこと
 跡をねのをきこの
 流子も今の詳とて
 さいつなや〜はせ
 必必ゆての所代ナリ
 文字あるゆ〜いども
 さ〜つら〜む〜い〜い
 意非天皇の所代ナリ
 海国とつ〜つ〜らじ
 とも片彼名を吉徳の
 大臣名るといふも能
 あり〜年恒久ハ〜を
 ろ〜つら〜む〜い〜い

夜に至るは自覺方小袖一
 裏袴の袴合身束の襦きで
 色も遠小袖と云ぬ〜樂者
 時門前〜越〜妻家〜素
 越〜上〜樂〜居〜花
 蓮自〜此方〜彼〜樂を

清風〜貝捕港の〜橋
 樂〜次〜法〜門内〜左
 必〜焚〜花〜庭〜續松〜交
 妻戸〜あ〜左〜右〜烟〜居〜在
 世男女武家〜宛〜橋〜解
 樂〜道〜左〜方〜橋

省くはくらの形を
 一してははたしの作
 としつゝはくら
 聚うのをめめ
 和考のあらひ神代
 己は弓をひ張るる
 手法とせむる
 手もめくまるる
 むてあま十三強ハ葉
 はぶじつらひて唐土
 の仕事多うその彈
 取の紐といふもの
 檢校とらふもの
 少て表紐七の書
 合を十三強と云ふ

まんじつ一ありおのく
 2の久唱音響ハ
 曲抄の字はつまびら
 小世者一あれハ
 たることこの紐の外
 おもわれく子持
 松曲あり



右方板一可七橋
 全三餅と云々
 右黙唄燭
 丸丸と云々
 清と紙燭
 貴と用
 式法
 平人
 宗

此の
 物
 肩
 物
 右
 廣
 蓋
 居
 右
 廣
 蓋
 居
 右
 廣
 蓋
 居

孝ぬの物のみ
 孝の唐士帝まつく
 丹敷おまのう
 白紙のちり又白紙のち
 ぶつ三百六十の目八二年
 の日改て表へ九曜の
 あつて再目のあつ
 ちの改ら八魏の曾植
 つつこの入り日中あ
 古物又唐入る世時
 指うつゆくとまつ人
 ううまのむらんめん
 まをとりておまがひら
 ち湯あかのかうや
 せんうのまがはま

まの画とちひてやう
 びのひらるるれがや
 んかけておるべ
 ひらあまのゆま
 雛松の由ま
 ひらおれひのこと
 かわけて或ハ己の日の
 ちの人の形まおと
 のひあひつ天悦まか
 るまのひつはひあ
 ちれが天悦と難と
 ちあひつあままつち
 ちを月ひあふるれ
 ちしく所のち
 ち入りちちち

限るは丈人相も
 室天下長白袖者
 白袖白練と
 則徳巻
 勝真去婿礼
 中可勝也
 婿目禮
 在配
 一決

才女侍女
 引仁
 致
 室
 方
 面
 女



ざりあはれ神天宮の
 中々難おまじとあは
 き何ありまればあ
 ら女の粧ひあはてあ
 せらる源氏あはら
 源氏の君のまごこと
 くらげらるる夜あ

とあせておまじあは
 入るう後その様あ
 妻の記一ご
 貝合せの
 貝ありせの由来ハ神
 代の元給張のまご
 どり起つて後ま
 天皇あは入新幸あ
 ぞ附麻徳のま門
 あし貝の拾ひの
 貝合せのまごあは
 この貝あはせ男女の
 うつしとませのあ
 屋目ごとくあはせ
 出目とまごあは

扶授有と摩年日記布律
 妻はつと親と娘女
 床を靴子と取と坐
 或人靴子抱と下坐
 女靴子と女舞と取
 酒心抱核と男舞と女

舞之上重祿と酒と抱核
 女握と靴子と取と核
 靴子抱と取と取と取
 靴子抱と取と取と取
 靴子抱と取と取と取
 靴子抱と取と取と取
 靴子抱と取と取と取
 靴子抱と取と取と取

かひまのり
をぬて嫁入の付小必

おあつたのちの
機織を由來

神代りの初りとの人
を本女は

おまの市見形
早後を織とのふ入

のまをり
きりけ機を女
國代田の里

まづの借と
乃るまより

とものいれ
都西の市

つゝなる術と
つゝなる術と



絶針を事
絶針を事

かゝりて
かゝりて

おまの市見
おまの市見

かゝりて
かゝりて

基上を至公叙二献飲時花

よる能子可加酒也二献加

飲二献也ままを嫁さる

父母之女教侍女為正無さる

嫁出た嫁一献飲二献加

加二献飲二後初三如之承

申二重打身出二後

右方り居ら二飲入五至室

善及美嫁方二持是嫁

生二と素あ二二献飲加

罪を至と本産を至と飲

下史初綿衣を申二九至

の死後死すやむ
 久くそ教のひしより
 下もちかろ又律条の
 こと八百済まより自
 効しつものま氣しそ
 かへ修へーしんる
 五男白き由ま
 元三六羊のともも月の
 ちどり日の初めれんえ
 三とのあま中とそ子相
 一井のあまごそ勝
 羊中の邦とそとそ
 ともの林の中そそ水
 司とそそそそそそ
 そそそそそそそそ
 横海ハそそ羊中の



の後より井の内より
 おきそ胡よれり
 俗はひひつてかまふ
 俗知めり朔日あ白
 穀と用の二日あ又後
 碑と用の白へ七日
 と人日らふ俗よりの

可居故人亦之を
 姑も之を身之を
 一獻飲加始之如
 さき好新飲る納る
 三の彦中物人至
 勝り右の居るた
 可居故人亦之を
 姑も之を身之を
 一獻飲加始之如
 さき好新飲る納る
 三の彦中物人至
 勝り右の居るた

聖世間之禮法
 初まよとそそそ
 加高貴とそそ
 俗の女と方
 其の身とそそ
 一度とそそ

又是以依の初めし今日
 七種のうろと孫八時七
 草しり大井草希又草
 七にぐ解の産産草
 まいしりの七草多うも
 主年の方病と修く云
 十三日門板しあき
 と焼ていんかどとるも
 今日の上をよふ二月
 八日の秋を候と日る
 俗は四月八日とまらり
 あやまると同十又日
 秋入候の日と遷遷
 命とるをもと又あやま
 まらう津八十二月十五日

あつとらふ三月の浴生
 の早い夕三日不所と
 上の巳の日あゆみ出
 吾とどうえ格とて周
 の代より初七日かか
 てん松野天室上巳小
 まえ
 あゆみと神事よりし事
 ありとくや
 四月朔日とをとる久
 といふ給よりつらつら
 五月又日のをたつと塔
 午とよばたつた海虫
 出て人のあし入ゆ人給
 八地のうろとつてを
 といふ一にふひひき

海に事と相果りてと丸
 納の事と君と主と休と
 の吸物と女と扇と扇と
 有と云と一と小南の母方
 居勝と云と此と格と取者
 の色と云と在と其と嫁と

持来と小袖と云と難と
 物と金限と云と為と
 老と云と老と云と金
 練と云と練と云と女
 老と云と老と云と女
 練と云と練と云と女
 老と云と老と云と女
 練と云と練と云と女

ててまをさすは昔浦
 の入るに御あつたま
 昔昔とほふひにて
 天目万病と除く
 六月朔日と合はる
 ありありに津天倉の
 中とたよりあり民をか
 去年の條と合はる

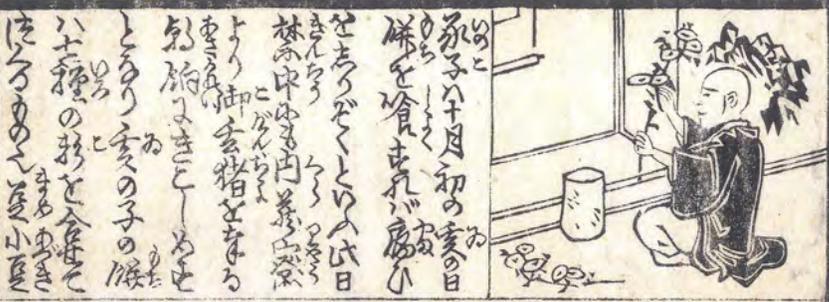


七月十日を申元と
 りひて唐土の夜と
 あつた民は魂
 まつりといひて来
 人をあつたはるは
 てお祭ある人へを
 見せむとて目
 のあつたお祭を見
 るとて目
 いさだまはるの
 びしてお祭内を
 二錠をむくお祭
 正月にせむるを
 玉はつとてお祭

至る洞酒と夜のお祭
 可なりお十二組と昔昔と
 お膳お七五三と文
 三の夜其お浪右と夜
 海を侍女お揚お舞お
 男お女お見お来お侍お来

お祭の序お男お女お
 おまお小男お女お追お夜お祝
 波お男お女お文お居おお祝
 男お女お飲お嫁お定お嫁お飲
 時お男お女お物おお嫁おお祝

まつりのおひのりせう
 はなまはあふ福はな
 けさのけさのまを
 けさのまをくまを
 まがーとあり八期を
 田圃の子れゆとの今ま
 田のまへて秋家の出
 来るは百世このま
 かんていせう
 かんていせう
 かんていせう
 まつりといふ月も日も
 くるりり陽を
 かんていせう
 かんていせう



秋の月月初のまの目
 餅を喰まれは腐小
 をまのくといひは日
 まんちや
 林の中にも内巻の茶
 ようし御金指をま
 乾船はまこ一もは
 とるのまの子の娘
 八上種の杉を金指で
 ほろものま小ま

穿之と云葉の娘秋吹
 男指男秋吹の娘遠家
 二秋吹の娘は秋吹の
 是の心まを之九及山男ま
 此有之と云吸物を出意
 方居出秋之取者出

買這男秋吹の娘
 女をまをまをまをまを
 穿之と云之秋吹の娘
 娘秋吹時姑は姑を娘
 秋吹の姑は姑秋吹の
 穿之と云之秋吹の娘
 穿之と云之秋吹の娘

三子松森栗柿胎
 子又松八一年小十二
 の子又うい国月あか
 土三の子なういゆか
 かのの藤も十二梅を
 三子ゆり十三梅八下
 松森の藤の子の藤
 八津の松木代門子
 ようなる先例申む
 かんようなる事
 七夕舟舟
 又の川あまきの風か
 秀乃まわてをなま
 うる鳥鶴のう

浪中のや舟よせ一
 こせよふふびませ
 七夕のうまなつり
 又のうこせ
 あり浪のこ人の相じろも
 ちるらぬぬの女藤ま
 秋風がわく
 大いこもなほもなほ
 まなりのつらなほ
 ひとこも移人
 七夕のうまなつり
 うらぬらん

出雲まゝの母をの阿多其燈
 誘ふ母の位牌のふたの燈
 夢の聲を二重の掛窓の並
 羅倉膳本の膳長持入男
 方遣又百八十の膳の燈入
 蓮の物持合の罪束の灯

策知の種を後の金屋
 男中袖を方姑の袖を亦小
 男道志為の事定先を燈
 出引渡の玉苦男の燈
 飲聲持聲の秋夜舟の燈
 物持聲の秋夜舟の燈

七夕の舟のハさし
 遠うらうらむと
 ひくくさうらむ
 天の川
 七夕の舟のハさし
 遠うらうらむと
 ひくくさうらむ

あん
 とむねもも又まうら
 ちり
 夜も多見らんよと
 わりまはらうら
 七夕の舟のハさし
 遠うらうらむと
 ひくくさうらむ

歌飲の地は如き
 念の雑考沙如歌飲
 聳立聳立歌飲如
 歌飲如之客は後考
 如人及物如聳立
 男は如男如歌飲

如春に同如吸物
 波る春若に全る
 本勝若に全る
 合同格也若に全る
 友勝ひ若角若に全る
 若無也仍の脱未記年又之略

江戸樂舎用

島原久酒
一任蜷川 狂舞向答
宝 家宝往來



萬歲替禮往來



後玄麻勝之
 一、
 二、
 三、
 四、
 五、
 六、
 七、
 八、
 九、
 十、



皆禮佳来
 事六一代一度大乳法
 可觀其
 式左

可觀其
 下俗
 兼文納
 縫酒
 一車
 者七

七夕の母のいへさし
まはさうさうさうさうさう
かきこももももももももも

ふかふかのふかふかのふかふか
ふかふかふかふかふかふか
ふかの川 あり

ふかふかふかふかふかふか
ふかふかふかふかふかふか
ふかの川 あり

二獻飲納の由書
今言の雅考次始
二獻飲納の由書

江戸樂舎用

下七切掌里

狂言抄

義定



新刻

天保

婚マコト禮レ往ヨウ來ライ

誤字改正

四民日用

幕

全

板元

從之麻勝者の
 おのの格さるゝ電
 一のさるゝとある大
 畧ハと云記さるゝ
 塔乳の亦日もある
 中申さるゝわさるゝ
 火の奈さるゝと格
 別るゝ庄領子相上
 小祝の亦手基さるゝ
 相命右の祝ひま
 左の祝ひ水入の
 さるゝとあるさるゝ
 祝屏の亦の方ふ
 中申さるゝ香盤
 相さるゝとある



高砂

鳴臺止
 高砂

婿禮往來
 事代一代一度と大乳法
 可祝事代り
 式左殿と禮老有分限



可應直肝要事先結納さるゝ
 下俗の老類と云唐去る志納
 兼納儀事と云筆意殊福
 絳酒唐織一板と物一惣酒
 一事兼白後一以上二重考持
 有者七荷七種がりの中筆事

湯つぎを赤眉と云ふ
 のちのちあつた相の
 かたうか上候はしえご
 名中大祝儀と云ふ
 支分をどむらうし又中
 候大祝儀と云ふのを
 かたうかそ外祝儀
 とも云ふなり又中
 角つぎのつぎ
 中まのつぎを十二
 入のけちうつぎと云
 ぶるなり
 奥の化装のつぎ
 十二のち高貝桶と云
 はれり一はれり



左の貝桶と云ふ
 花
 苗をとりて
 苗を生むるは日本
 限の風俗と云ふは
 このてをいへば物の
 色もあまきつたは
 少のまらつたは

練板と物縫着
 二重着
 白袖一重と中袖一重二
 荷二程と云ふは今果
 中果着る博寿
 代金と取針

聳と方と
 可及
 重と
 限の博着
 時と中袖
 袴の返袖

仍て世化は嫌て妻
 とり入らるるは
 いろおのちの中外の及ぶ
 條うらたうやく再ひ
 異まはすまふまふと
 のまらふ又堂平百ハ
 廿中又相うまふ加大
 んも苗を條あつて
 足さ
 地表の所代より初と
 りうまらその條あつて
 ちやまらとて
 いづも類ハ
 文子の盤鶴の
 唐土皇帝の臣小茶
 類とらふ人の臣と

文をてあつて写して文字
 と制れり此をよわん
 と身の條とまらふは
 跡とれんをかまふの
 漢字もまらふ條と
 さつらわらふは
 をまらふての所代より
 文字あつてよりいづも
 さつらわらふは
 皇朝天皇の所附は百
 條目よりつらうらじ
 とつらば多る吉條の
 大臣作つての人も他
 ろく半條及のまらふの
 ろくつらわらふは

夜に至るも自聲方小袖一
 裏移るは衣身束の條とて
 世も遠小袖とて嫁と樂業
 時門の慈と妻家と世
 遊上と樂と居末と祝
 蓮自是世方と役と樂と

清殿(目)相添る末時と
 樂と次と法と黒門内左右と
 必と焚と庭と續松と文
 妻戸とあ左右と細と居と衣
 世男女武と宛と橋と解と事
 樂と道と左と方と解と

昔くくひらの形せり
 一そいほはる文の作
 こまのくくくくく
 茶うのまゆあひ平
 糸平のまゆあひ神代の
 こけりつとふ張るくく
 ま張るとはるくくく
 そくくくくくくくく
 ろておもふ十三張り金葉
 せつびとくくくで唐土で
 のせ平あつその陣おる
 平の延くくくあひ八拍
 接接とくくくあひ出る
 ろて表製とくくくく
 合合とくくくくくく



かん絶十一あひあひく
 その及鳴二音あひ八拍
 曲抄のまゆあひつぎがら
 せくくくくあひあひくく
 まつんむくくくの製の外
 ぶくくくくくくく
 秘曲あひくく

右三方板くくく可く七揃必奏
 合三餅とくくく又琴戸と膝と丸
 右黙壇燭漆と通た足跡
 中央九と流しと美と真と春
 消と紙燭持と云と也と書
 貴と用と武法と交と年と念

此と球とと権先と武法と
 装束にと女と女とと持と
 物と袖と重と上下と具と若と助
 扇と冬と紙と香と也と俗と鼻
 須と子と文と胆拾と腰と流と衣と
 右廣と蓋と居ととととととと

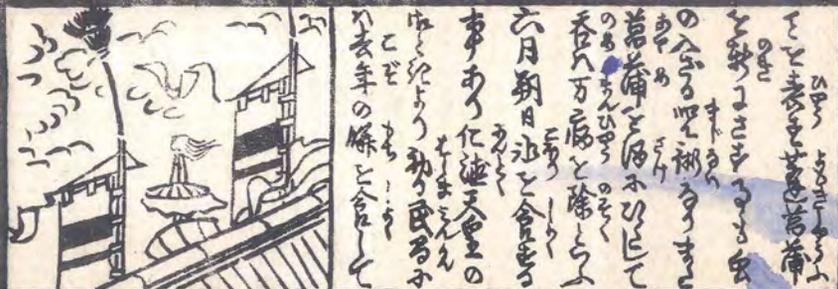
可居故人亦之至也
 姑息之至也
 二獻飲加拾之如
 さき嫁新飲之納之是る
 三之序也故人至之
 饒之右の居るたるとは



可居故人亦之至也
 姑息之至也
 二獻飲加拾之如
 さき嫁新飲之納之是る
 三之序也故人至之
 饒之右の居るたるとは

可居故人亦之至也
 姑息之至也
 二獻飲加拾之如
 さき嫁新飲之納之是る
 三之序也故人至之
 饒之右の居るたるとは

可居故人亦之至也
 姑息之至也
 二獻飲加拾之如
 さき嫁新飲之納之是る
 三之序也故人至之
 饒之右の居るたるとは



てこまきまき...
おのゝ...
若翁と...
六月朔日...
ありあり...
七月十八日...
あつ...
ま...
人...
し...
買...
の...
い...
二...
ま...
玉...

至る洞酒...
可...
本...
三...
汝...
男...

曾...
又...
使...
波...
留...
時...

かつのれいゆのせう
 日吉のゆめ
 生るのけい
 八朝せ
 田圃の子
 田のま
 ちん
 言
 田のま
 ちん
 言
 田のま
 ちん
 言



承子の十月 初の亥の日
 餅を喰まされぬ
 林の中
 御金猪

男返 男 秋 嫁 婿 家
 婿 秋 嫁 婿 家
 婿 秋 嫁 婿 家
 婿 秋 嫁 婿 家
 婿 秋 嫁 婿 家

婿 秋 嫁 婿 家
 婿 秋 嫁 婿 家
 婿 秋 嫁 婿 家
 婿 秋 嫁 婿 家
 婿 秋 嫁 婿 家

ナホチ

七々の月、夜ついでに
 遠くうらむらむと一
 ひくことなること
 今あつたの早の鳥入
 天の川
 年ふふあふふと
 七々の鳥の夜ついでに
 かうつ
 七々の鳥の夜ついでに
 提の鳥の夜ついでに
 鳥の夜ついでに
 鳥の夜ついでに
 鳥の夜ついでに
 鳥の夜ついでに
 鳥の夜ついでに

七々の鳥の夜ついでに
 七々の鳥の夜ついでに
 七々の鳥の夜ついでに
 七々の鳥の夜ついでに
 七々の鳥の夜ついでに
 七々の鳥の夜ついでに
 七々の鳥の夜ついでに
 七々の鳥の夜ついでに
 七々の鳥の夜ついでに
 七々の鳥の夜ついでに

七々の鳥の夜ついでに
 七々の鳥の夜ついでに
 七々の鳥の夜ついでに
 七々の鳥の夜ついでに
 七々の鳥の夜ついでに
 七々の鳥の夜ついでに
 七々の鳥の夜ついでに
 七々の鳥の夜ついでに
 七々の鳥の夜ついでに
 七々の鳥の夜ついでに

七々の鳥の夜ついでに
 七々の鳥の夜ついでに
 七々の鳥の夜ついでに
 七々の鳥の夜ついでに
 七々の鳥の夜ついでに
 七々の鳥の夜ついでに
 七々の鳥の夜ついでに
 七々の鳥の夜ついでに
 七々の鳥の夜ついでに
 七々の鳥の夜ついでに



江戸樂舎用

福海堂

江戸樂舎用

婚禮往来

従玄床勝々の
 一は、
 畧のこみ
 嫁のの
 女中
 此の
 別
 小
 梅
 左
 破屏
 中
 梅
 左
 破
 中
 梅
 左



高破

皆禮徒来
 其
 中
 事
 子
 或
 左
 殿
 主
 禮
 先
 角
 分
 限

可
 下
 葉
 條
 一
 事
 者

仍て女化し嫁して妻
 とりてはるは馬くさ
 一の香の中へ外の良
 深へくはたやく再ひ
 異はまはまはまきと
 のささり又堂上育ハ
 女中は消くまはは女
 屋も苗と藤ゆふて
 えき
 地井の所付よう物と
 りくはるその屋あゆ
 あやまてはやくあ
 いも疑い
 文の盤鯛の
 唐土皇帝の及小茶
 顔とわんもの屋かと

日本ありて文字
 と制れり此をよらん
 日本書の体とまここ
 跡見れはをきとの
 漢字も入るの難を
 きこるわしはま
 本の中を六代代より
 文字をあつしりい
 日本天皇の御用ま
 御国よつりつらじ
 とり平故多の吉徳の
 大臣能くとりふも能
 るく平能多ハもま
 たりつらあつりくふ

夜に至るは自筆方小袖一
 重行万珍合母弟の
 貴は遠小袖をまぬ
 時にかたてを家か
 る遊上を遊む居来花
 運自更此方も役を

清殿 貝捕港の末時
 樂は清黒川内左右
 公は英毛と庭を徳松と又
 妻戸もあ左右の居在
 世男女武宛の橋屋中
 妻は通左方と雁と

省しくひらうの形を
 二つとては作大の作
 とまのうらうら
 張りのもの車
 和歌のあらうの神代
 の節をとりその障
 の組とりのみわの八
 校校とらわの神出
 して表組とりの書
 合せて十三使とま
 合せて十三使とま

まん組十二の形
 二の及鳴書
 曲抄のまき
 今世者くわね
 まつとては作大
 子もはねく
 以て
 秘曲あり



右上方後一可七橋必
 合三餅三三妻戸三際三九
 右黙踊燭三連三三
 中央三三三三三三三三三
 消三紙燭三三三三三三三
 貴三用三三三三三三三三三

此三三三三三三三三三三
 此三三三三三三三三三三
 物三三三三三三三三三三
 扇三三三三三三三三三三
 紙三三三三三三三三三三
 右三三三三三三三三三三



さるあまふ神天皇の
御宇小宮の御宇の
中々難おまじと
き何ありおれは
さるの御宇の御宇
さるの御宇の御宇
さるの御宇の御宇
さるの御宇の御宇
さるの御宇の御宇
さるの御宇の御宇

とよせておまじと
さるの御宇の御宇
さるの御宇の御宇

扶授有る慶年兜布後集を
皇孫の親王後女等
床を籠りて女坐おまじ
或人鮎子抱て下坐
お籠りて女蝶と御宇
酒の抱後又男蝶と女

蝶と上重祿も酒を抱後
お籠りて鮎子と御宇
鮎子抱て敵人路を担て
魚を抱て後と出ま持持
女持居る御宇持本改て人
三本と御宇あ可持集

と宿し婦人の村小必
 指せりわののの
 機織り由年
 初代り初り人
 室の由に兒形
 美娘を織り入
 のまのりせり
 まつけ核を女
 園田の里は
 ままの指と織
 のりより指
 と西の市ま
 まの指と織



縫針と事
 縫をりも神代
 かにて針や
 衣箱をせり
 ねみ糸のた
 かの仕と今
 必ありま
 くの吉徳と

基と金必二飲飲時
 よる能子可加酒中
 飲の二飲也
 及孫と女飲侍女
 嫁出の嫁一飲飲
 加二飲飲後初
 加二飲飲後初

中一連打男
 右方の店
 海邊
 生と
 器
 下

のしん 彼能あておひ
 くるて 教めひし
 ちを ちかへ 又 後年の
 そへ 百濟 承りて 貞
 効といひの 来れし
 あり 傳へりし
 五 月 廿一日 由来
 元二六 年 の もの 月
 さしめ 日 の 初め けえ
 三の 念ふ 事し 月
 一 井の 念ふ こと 勝
 年中の 邦に せん
 とあり 林の中 主水
 司とて 事あり 要
 ち横海 八廿も 年中の



一 月 廿一日 青の
 ちとて 紅の 代れ 入 咄 日
 の 夜より 井の 内まつ
 あり ち 初め あり
 俗に びんて ち あり
 俗に 知めり 期日 あり
 初と 用ひ 三日 あり
 律 教と 用ひ 七日
 と 入日 と あり

可居 故人 亦 之 坐 之 更
 坊 之 身 之 坐 之 坐 之
 亦 飲 加 始 之 如 之 之
 之 坐 之 亦 飲 之 之 坐 之
 之 坐 之 亦 飲 之 坐 之
 之 坐 之 亦 飲 之 坐 之
 之 坐 之 亦 飲 之 坐 之
 之 坐 之 亦 飲 之 坐 之
 之 坐 之 亦 飲 之 坐 之
 之 坐 之 亦 飲 之 坐 之
 之 坐 之 亦 飲 之 坐 之

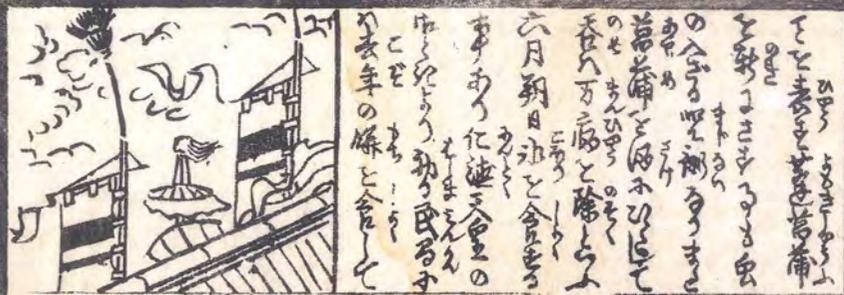
聖 世 間 之 禮 法 家 之 飲
 初 之 身 之 坐 之 坐 之
 加 高 貴 之 坐 之 坐 之 下
 俗 之 女 之 方 之 坐 之 坐 之
 亦 坐 之 坐 之 坐 之 坐 之
 亦 坐 之 坐 之 坐 之 坐 之
 亦 坐 之 坐 之 坐 之 坐 之
 亦 坐 之 坐 之 坐 之 坐 之

三月廿三日の沐浴
 の事三日の御
 上の巳の日の御
 聖と云ふは
 の代より初七日
 下は土曜天皇
 御遊御幸あり
 四月朔日
 四月朔日
 三月又日の
 午と云は
 出で人の
 地の
 食

三月廿三日の沐浴
 の事三日の御
 上の巳の日の御
 聖と云ふは
 の代より初七日
 下は土曜天皇
 御遊御幸あり
 四月朔日
 四月朔日
 三月又日の
 午と云は
 出で人の
 地の
 食

海は東之由果の二九夜
 納めまはせしは
 吸物此は女房
 有るは
 居勝
 乃是

持来
 物老
 老
 練
 考
 法
 法



玉の洞窟はあつた
 可なりと組と菓子
 小膳お七
 三の夜其公限右
 淑清女着揚梅子
 男姑金見来中作交来

七月十二日を伴元と
 りして居まはれ
 ありんか民男
 まつらとあひて
 人をたぬれつ
 ちかぬあつた
 目
 のあつた
 二
 三
 四
 五

骨礼の序男姑
 玉小男
 淑清女
 男姑金見来
 中作交来

小甚語類卷中
茶

云云

人由浦志

以

慶應元年
生

十七